

第8週 曲線の長さおよび線積分

8.1 曲線の長さ

1 変数 t のベクトル値関数 p が曲線であるとし, p の定義域を開区間 I とする. $a, b \in I$ は $a < b$ を満たすとし, $p(a), p(b)$ の終点をそれぞれ A, B で表す (p の始点を开区間 I の点の取り方に依らない空間の固定された 1 点とする). 曲線 p の A から B までの長さは, 微分積分 I で現れた 1 変数関数のグラフの長さと同様に定義される. n を正の整数とし, $t_0, t_1, \dots, t_{n-1}, t_n \in I$ は閉区間 $[a, b]$ の分割を与えるとする, つまり $a = t_0 < t_1 < \dots < t_{n-1} < t_n = b$ となるようにとる. $p(t_i)$ の終点を P_i で表すとき, $A = P_0, P_1, \dots, P_{n-1}, P_n = B$ が定める折線の長さは曲線 p の A から B までの長さを近似していると考えられ,

$$\sum_{i=1}^n |p(t_i) - p(t_{i-1})| = \sum_{i=1}^n \left| \frac{1}{t_i - t_{i-1}} (p(t_i) - p(t_{i-1})) \right| (t_i - t_{i-1})$$

と表される. n を限りなく大きくしていき $[a, b]$ の分割の中 $\max_{i=1, \dots, n} (t_i - t_{i-1})$ が限りなく 0 に近づくようにするとき, 上の折線の長さは

$$\int_a^b |p'(t)| dt \quad \left(p'(t) = \frac{dp}{dt}(t) \right)$$

に近づく. この値が曲線 p の A から B までの 長さ である. t の関数 $s = s(t)$ を

$$s(t) = \int_a^t |p'(t)| dt$$

で定めると, $s'(t) = |p'(t)| \neq 0$ なので, $s = s(t)$ は逆関数 $t = t(s)$ を持ち従って p を s の関数とすることができる. このとき s は p の弧長パラメータである.

8.2 スカラー場の線積分

f をスカラー場とする. s を p の弧長パラメータとする. s が $s = \alpha$ から $s = \beta$ まで動くとき, 曲線 p に沿う f の積分を考えたい. 曲線 p の点 A, B をそれぞれ $A = p(\alpha), B = p(\beta)$ とする. $\alpha < \beta$ とする. n を正の整数とし, $s_0 = \alpha, s_1, \dots, s_{n-1}, s_n = \beta$ は閉区間 $[\alpha, \beta]$ の分割を与えるとする. このとき

$$\sum_{i=1}^n f(p(s_i))(s_i - s_{i-1}) \tag{1}$$

は今考えている積分に関する f の Riemann 和であり, n を限りなく大きくしていき $[\alpha, \beta]$ の分割の中 $\max_{i=1, \dots, n} (s_i - s_{i-1})$ を限りなく 0 に近づけると, (1) の値は 1 変数 s の関数である $f(p(s))$ の積分

$$\int_{\alpha}^{\beta} f(p(s)) ds$$

に近づく. この値を $\int_A^B f ds$ または $\int_C f ds$ で表す, 但し $C = \{p(s) \mid \alpha \leq s \leq \beta\}$ である (つまり C は $\alpha \leq s \leq \beta$ に対し $p(s)$ の終点と表される点の集合である). これを曲線 p の A から B までのスカラー場 f の 線積分 とよぶ. 曲線 p の一般のパラメータ t について, $A = p(a), B = p(b)$ とする, 但し $a < b$ とする. このとき $s'(t) = |p'(t)|$ を用いて,

$$\int_A^B f ds = \int_a^b f(p(t)) |p'(t)| dt$$

がわかる. 曲線 p の点 B から点 A までの線積分 $\int_B^A f ds$ は $-\int_A^B f ds$ に等しい.

第8週 曲線の長さおよび線積分 (続き)

8.3 ベクトル場の線積分

t を曲線 p の単位接線ベクトルとする: $t = \frac{dp}{ds}$. このときベクトル場 V に対し, 曲線の各点で V と t の内積という値を対応させる関数 $V \cdot t$ を考えることができる. これを s の関数とみなし, ベクトル場 V の曲線 p の点 $A = p(\alpha)$ から点 $B = p(\beta)$ までの 線積分 $\int_A^B V \cdot dr$ (または $\int_C V \cdot dr$) を

$$\int_A^B V \cdot dr = \int_\alpha^\beta (V \cdot t)(s) ds$$

で定める. V を $V = (V_1, V_2, V_3)$ と表しまた p を $p(s) = (x(s), y(s), z(s))$ と表すとき,

$$\int_A^B V \cdot dr = \int_\alpha^\beta \left(V_1(p(s)) \frac{dx}{ds}(s) + V_2(p(s)) \frac{dy}{ds}(s) + V_3(p(s)) \frac{dz}{ds}(s) \right) ds$$

が成り立つことに着目して, $\int_A^B V \cdot dr$ を

$$\int_A^B (V_1 dx + V_2 dy + V_3 dz) \quad \left(\text{または} \int_C (V_1 dx + V_2 dy + V_3 dz) \right)$$

とも表す. 特に, スカラー場 f に対しベクトル場 V を $V = (f, 0, 0)$ で定めるとき, 線積分 $\int_A^B V \cdot dr$ を $\int_A^B f dx$ で表す. $\int_A^B f dy, \int_A^B f dz$ についても同様である.

8.4 線積分に関する注意事項

曲線 p が 閉曲線 である, つまり任意の s に対し $p(s) = p(s+l)$ が成り立つような (s に依らない) 正数 l が存在するとする. このとき $A = p(\alpha)$ と $B = p(\alpha+l)$ は等しく, 線積分 $\int_A^B f ds$ を $\oint_C f ds$ で表す, 但し $C = \{p(s) \mid \alpha \leq s \leq \alpha+l\}$ である.

曲線 p は任意の t に対し $p'(t) \neq o$ を満たす. 一方で, 線積分を考えるときには, 以上のような曲線だけではなく, 1 変数ベクトル値関数 p で, 有限個の点において p' が連続ではないが右極限および左極限を持ちかつ他の点では $p' \neq o$ となるものも考えることがある. このようなベクトル値関数を 区分的に滑らかな曲線 と呼ぶ. 区分的に滑らかな曲線 p の点 A から点 B までの線積分 $\int_A^B f ds$ を $\sum_{i=1}^n \int_{P_{i-1}}^{P_i} f ds$ で定める, 但し P_i は $p(t_i)$ の終点であり, また $t_0 = a < t_1 < \dots < t_{n-1} < t_n = b$ および $i = 1, \dots, n$ に対し (t_{i-1}, t_i) 上で p は曲線である ($p' \neq o$) とする.

スカラー場 f およびベクトル場 $V = V_1 i + V_2 j + V_3 k$ に対し,

$$\begin{aligned} \int_A^B f dr &= i \int_A^B f dx + j \int_A^B f dy + k \int_A^B f dz, \\ \int_A^B V ds &= i \int_A^B V_1 ds + j \int_A^B V_2 ds + k \int_A^B V_3 ds, \\ \int_A^B V \times dr &= \int_A^B V \times t ds = i \int_A^B (V_2 dz - V_3 dy) + j \int_A^B (V_3 dx - V_1 dz) + k \int_A^B (V_1 dy - V_2 dx) \end{aligned}$$

という線積分を考えることがある.